

巽 孝之 著

『思い出のブックカフェ
——巽孝之書評集成』



著者の「カフェ」がオープンしたのは10年ほど前のことだ。ゼミのホームページ、*Cafe Panic Americana* は、まだブログという言葉もなく、大学ゼミのHPも珍しく、シラバスのオンライン公開も求められなかった当時、画期的な研究の場を提供した。圧倒的な情報量、垢ぬけたデザイン、そしてネットを通じて惜しみなく知を共有しようとする寛大かつ挑発的な姿勢、いずれも斬新このうえなかった。あの「カフェ」が、今日の個人の研究ページや書評ブログのブームを牽引してきたといえよう。

ゼミのHP名からも推察できるように、著者にとって「カフェ」とは特に愛着のある場所のようだ。それゆえ、タイトルに「カフェ」を掲げた本書は、すでに多数の本を出版している著者にとっても、特別な一冊に違いない。新聞、雑誌、学会誌、対談、文学賞の審査委員会を通じて、「四半世紀ほどの書評経

験」を重ねてきた著者の集大成と銘打たれている本書は、書評集というよりも、著者の本に対する愛の告白集というほうがふさわしい。愛の力以外の何によって、240冊以上の本について、850冊以上の本を言及しながら書評することができるだろうか。そう思いながら本書を読み返すと、著者が一冊の本のごく細部まで味わいつくしていること、本と本との「奇遇」ともいえる連関に（インターテクスチュアリティなどという理論的な概念を超えて）心ふるわせていることがうかがえて、胸が熱くなる。

と同時に、本書はまた、優れた書評には何が必要なのかを教えてくれる。1) 過不足のない内容紹介、2) 書評対象図書と（意外な）連関のある本への言及、3) 最後の決め台詞、によって、読者がぜひその図書を読みたくなるような書評が完成する。字数の短い新聞書評では1)、3)の技が冴えわたり、雑誌や学会誌書評では2)に力点がおかれている。その好例は、新聞書評『オードリー・ヘプバーンズ・ネック』（1997年『読売新聞』）や雑誌書評『オスカー・ワイルドのアメリカ』（2004年『eとらんす』）だろう。

第IV部の高山宏氏との対談の中で著者は、「当時は大学3年、4年になって『ユリイカ』や『現代思想』を読み始めるころ、どうしたって富山、高山という名前を見るわけですね。このおふたりによる文章が、どうやら我が国における英文学研究の最先端であるらしい、ということぐらひは青二才でもわかる」と語っている。自らの過去を振り返る著者のこの言葉に、はっとした読者は私だけではないだろう。「富山、高山」を「柴田、巽」に、「英」を「米」に変えれば、著者の言葉をわがことのように感じる若いアメリカ文学研究者も多いのではない

だろうか。常に海外の最先端の研究を追いかけ、紹介し、実践し続けるのはまことに至難の業である。著者は学生時代から今日までそれをずっと続けてきたのだ。日本のアメリカ文学研究における著者の大きな功績が、どのような背景の中で成し遂げられたのかを知ることができる点もまた、本書の魅力のひとつである。

エピローグの中で、著者は書評を絵葉書になぞらえている。書評とは、感動を共有したくて「いま・ここにはいない誰か」に届ける絵葉書のようなものだという。そこで本書の英語タイトルが *Other Cafés, Other Books* であることは示唆的である。Truman Capote の *Other Voices, Other Rooms* へのオマージュだとすれば、「ブックカフェ」とは他者と対峙する場であるとともに、他者とひとつになるという無常の恍惚感を与えてくれる場であるということも伝えているとも読める。あるいは活躍の場が音楽や宇宙空間にも広がる著者ゆえ、スペースシャトルの“wakeup call”の歌声としても知られる Nancy Griffith のアルバムタイトルへのオマージュなのかもしれないが。（研究社、2009年2月、四六判 xvi+370頁、2,400円）

——田辺 千景（学習院大学准教授）